

---

### (3) 性感染症定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員

鹿児島大学病院 血液浄化療法部

准教授 速見浩士

---

平成31年1月から令和元年12月における鹿児島県内16定点からの性感染症4疾患の患者報告数は、(1)性器クラミジア感染症443人、(2)性器ヘルペスウイルス感染症102人、(3)尖圭コンジローマ86人、(4)淋菌感染症222人であった。報告数の合計は853人であり、平成29年の報告数960人から107人(11.1%)減少し、平成30年の報告数874人から21人(2.4%)減少した。疾患別の増減では、性器クラミジア感染症、性器ヘルペスウイルス感染症、および淋菌感染症において報告数が減少しており、特に性器ヘルペスウイルス感染症は6.4%と最も大きく減少した。昨年よりも患者数が増加した疾患は尖圭コンジローマで36.5%増であり、4年連続の増加であった。

(1)性器クラミジア感染症は *Chlamydia trachomatis* が原因微生物の性感染症であり、男性では尿道炎、精巣上体炎を、女性では子宮頸管炎、骨盤腹膜炎などを発症する。令和元年の患者数は、平成30年の467人から24人(5.1%)減少し443人であった。月別の報告数は平成29年、平成30年と比較すると2月、11月、および12月で報告数が増加していた。保健所別報告数では、始良、鹿児島市、川薩の順に多く、全体の約83%を占めた。年齢層別の比率をみると、3年連続で20~24歳(26.6%)、25~29歳、30~34歳の順に多く、これらの3年齢層で全体の約66%を占めた。また15~19歳と30~39歳の比率が低下し、20~24歳と25~29歳では比率が増加した。15歳~29歳の性器クラミジア感染症患者数234名は性感染症4疾患全体の約27%であり、同年代での男女比は1.4:1で男性の比率が高かった。

(2)性器ヘルペスウイルス感染症は、単純ヘルペスウイルス(herpes simplex virus: HSV, HSV 1型又は2型)の感染により発症する。令和元年は102人が報告され、平成30年の109人から7人(6.4%)減少した。月別の報告数は平成29年、平成30年と比較して5月と11月の2カ月で報告数が増加し、4月、6月、および12月の3カ月で報告数が減少していた。保健所別報告数では、鹿児島市が84件と最も多く、全体の82%を占めた。年齢層別には35~39歳、25~29歳(それぞれ17.6%, 14.7%)の順に多くみられた。前年と比較した場合、15~29歳の比率が38%から26%へ低下したことと、15~19歳の5名と20~24歳の7名は全て女性であったことが特徴的であった。

(3)尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス(ヒト乳頭腫ウイルス: HPV)の感染により、性器周辺に生じる有疣状腫瘍である。令和元年の患者数は86人であり、平成30年の63人より23人(36.5%)増加し、調査対象の性感染症4疾患の中で唯一増加した。月別の報告数は、平成29年と比較すると2月と12月を除く10カ月で報告数が増加し、平成30年に比べると3月、6月、8月、および11月を除く8カ月で報告数の増加がみられた。保健所別報告数では鹿児島市、始良の順に多く、全体の92%を占めた。患者年齢層別では25~29歳、30~34歳、20~24歳の順に多く、20~29歳が全体の34.9%を占めた。また平成30年と比較して、20~24歳、25~29歳、

および 30～34 歳での比率が上昇したことが特徴的であった。

(4) 淋菌感染症は *Neisseria gonorrhoeae* による性感染症であり、男性では尿道炎、精巣上体炎を、女性では子宮頸管炎や骨盤腹膜炎を発症する。令和元年の淋菌感染症の患者数は 222 人であり、平成 30 年の 235 人から 13 人 (5.5%) 減少した。月別の報告数をみると以前みられていた夏季に限って多い傾向は認められず、2 月が最も報告数が多く 7 月が最も少なかった。また月別の報告数は平成 29 年、平成 30 年と比較すると 6 月～9 月で報告数が減少していた。保健所別報告数では、始良、鹿児島市、鹿屋の順に多く全体の約 91 % を占め、始良からの報告は全体の 64% であった。年齢層別には 20 歳台にピークがあり、20 歳～29 歳の年齢層が全体の 42 % を占めた。また、平成 30 年と比較して、15 歳～19 歳の比率が 7.2% から 5.9% へと低下し、30 歳～39 歳の比率が 23.8% から 28.4% へと上昇した。女性患者が 35 人で約 16% であり例年と同様に低率であった。

令和元年の性感染症発生動向の特徴は、平成 30 年と比較して尖圭コンジローマを除いた 3 疾患において報告数が減少したこと、性器ヘルペスウイルス感染症を除いた 3 疾患において 20 歳～29 歳の比率が 30 歳～39 歳の比率と比べて高かったこと、淋菌感染症において前年と同様に女性の比率が 20% 未満であったことであった。また、性器ヘルペスウイルス感染症を除いた 3 疾患での 10 歳代における患者発生比率が低下していた点については、性感染症のさらなる低年齢化の抑制を示唆する所見と見なしてよいのか嚴重な監視が必要である。また、性器クラミジア感染症と淋菌感染症で始良保健所からの報告数が最も多かったことが地域的な特徴であった。

#### 鹿児島県の性感染症発生状況の年次推移と疾患別男女比

平成 11 年から令和元年の 4 性感染症の 1 定点あたり報告数の年次推移を見ると、令和元年は 53.3 であり、平成 30 年と比べ 2 年連続の減少であった (図 1)。男女比は 2.3:1 と男性の比率が 6 年ぶりに低下した。性器クラミジア感染症と淋菌感染症の男女比はそれぞれ 2.1:1、5.3:1 であった (図 2)。平成 27 年までは性器クラミジア感染症の男女比が等しいことが鹿児島県の特徴であったが、4 年連続で男性患者数が女性患者数を上回り、男性の比率が年々上昇している。性器クラミジア感染症は女性患者が多いとする厚生科学研究班の全国サーベイランス報告や全国総数の男女比とは異なった結果であり、本県の性感染症の特徴として今後も動向の監視が必要である。

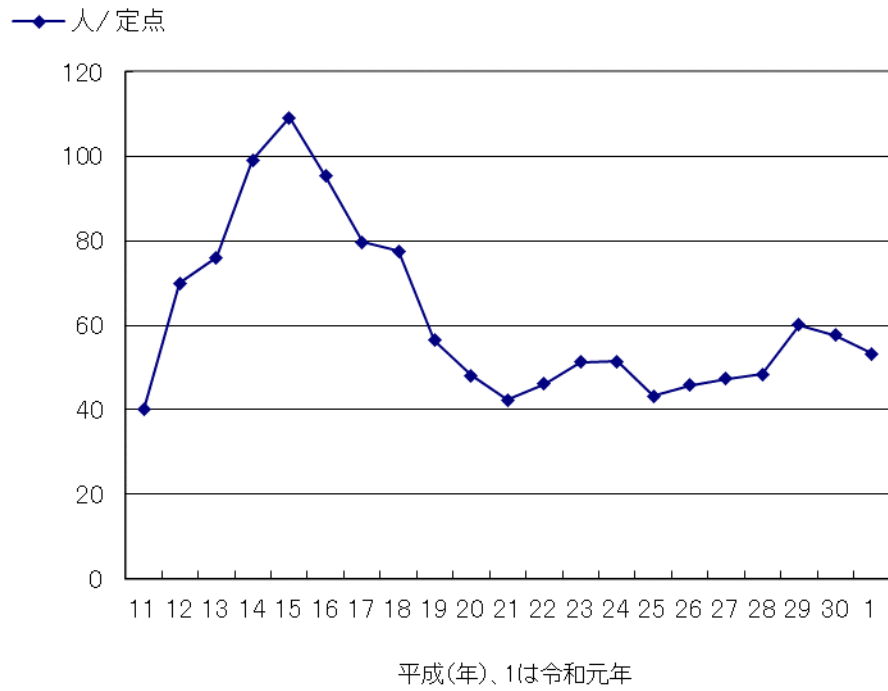


図1 性感染症の年次別定点当たりの報告数

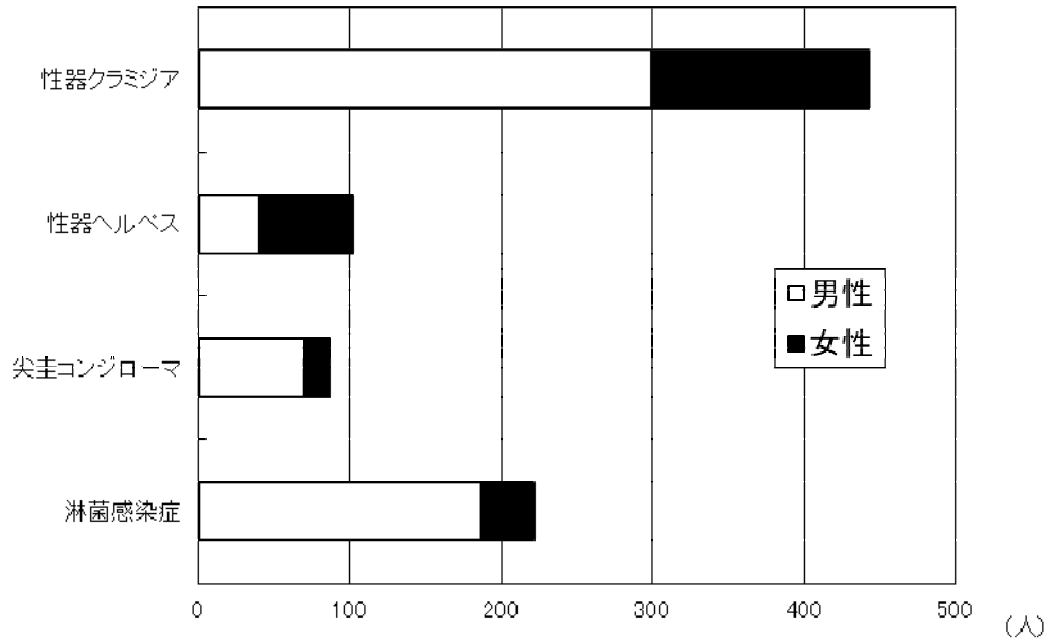


図2 令和元年の性感染症の疾病別男女別報告数（鹿児島県）

## 22)性器クラミジア感染症

(定義) *Chlamydia trachomatis* による性感染症である。

令和元年の性器クラミジア感染症の報告数は443人(累積定点当たり報告数27.69)で、平成30年(467人)より24人少なかった。月別報告数では、5月と12月が44人で最も多く(図2-22-1)、全国と比較すると、前半は県の報告数が高めに推移し、6月から10月にかけては逆に低めで推移した(図2-22-2)。年齢別では、20~24歳(26.6%)、25~29歳(21.4%)、30~34歳(17.6%)の順に多かった(図2-22-3)。

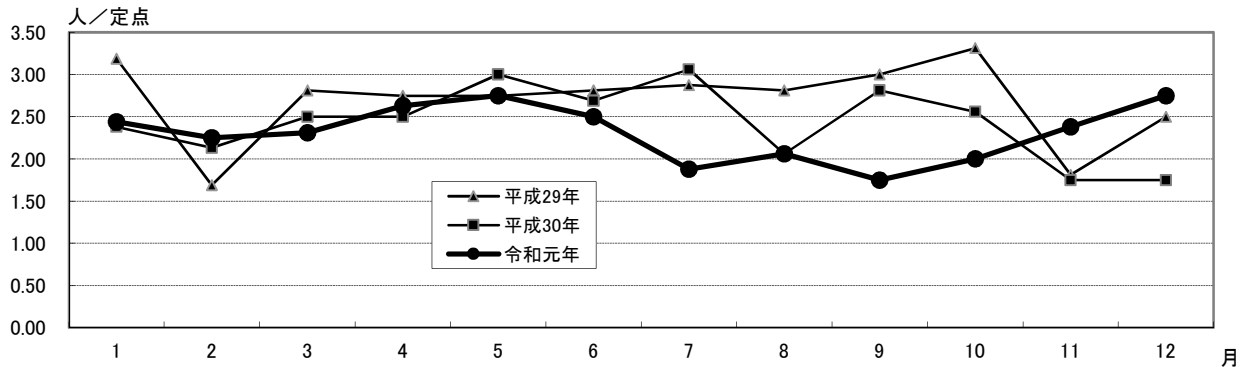


図2-22-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

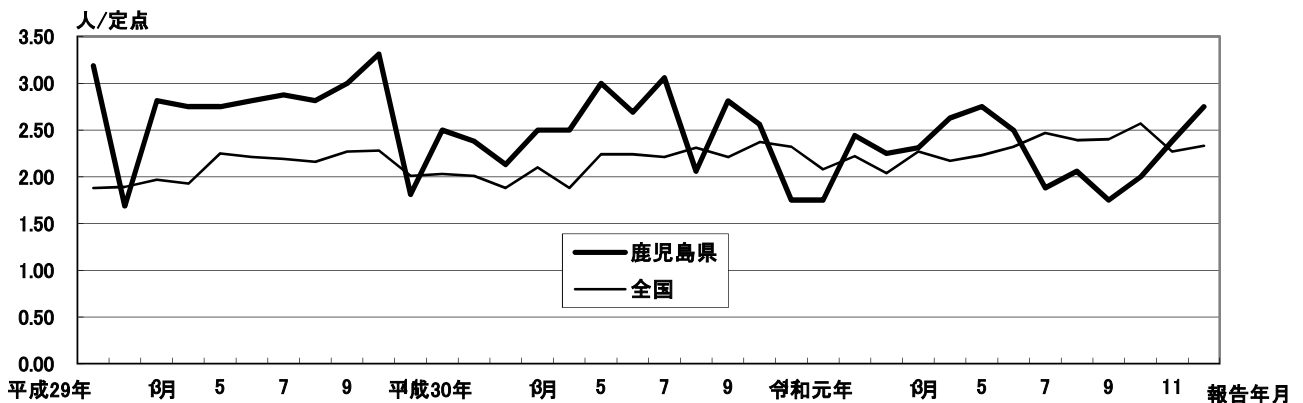


図2-22-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

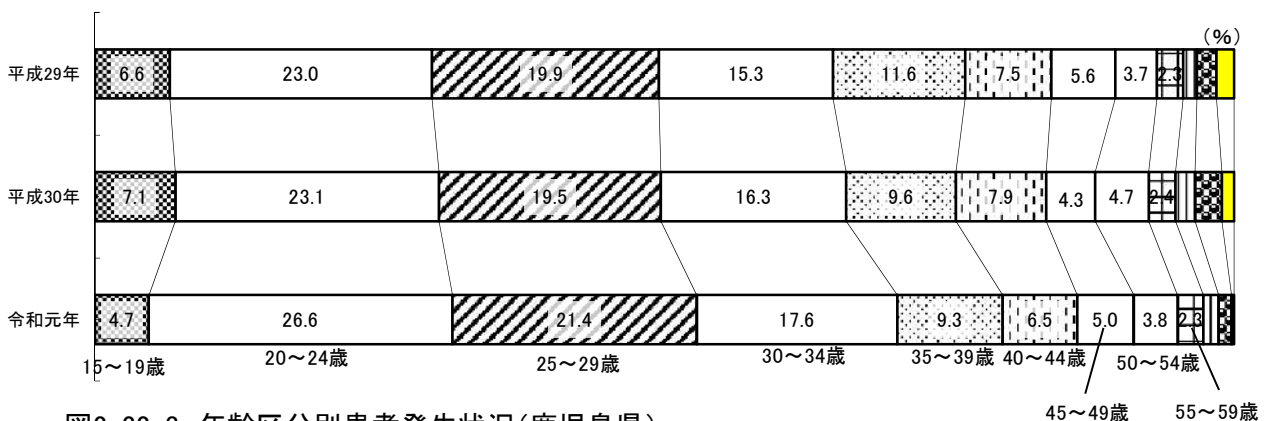


図2-22-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 23)性器ヘルペスウイルス感染症

(定義) 単純ヘルペスウイルス(herpes simplex virus:HSV, HSV1型又は2型)が感染し、性器またはその付近に発症したものを性器ヘルペスという。

令和元年の性器ヘルペスウイルス感染症の報告数は102人(累積定点当たり報告数6.38)で、平成30年(109人)より7人少なかった。月別報告数では、5月(17人)が特に多かった(図2-23-1)。全国と比較すると、年間を通じて全国よりも少ない状況で推移したが、5月だけが全国より高値であった(図2-23-2)。年齢別では、35～39歳(17.6%)、25～29歳(14.7%)、30～34歳(13.7%)、の順に多かった(図2-23-3)。

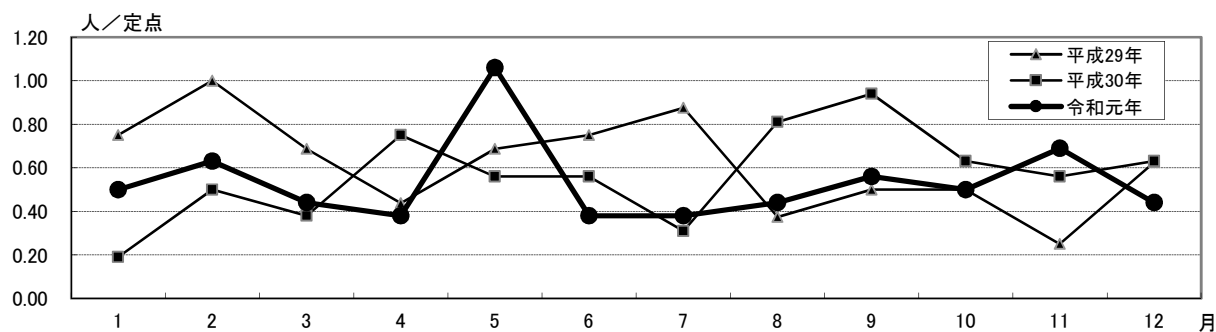


図2-23-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

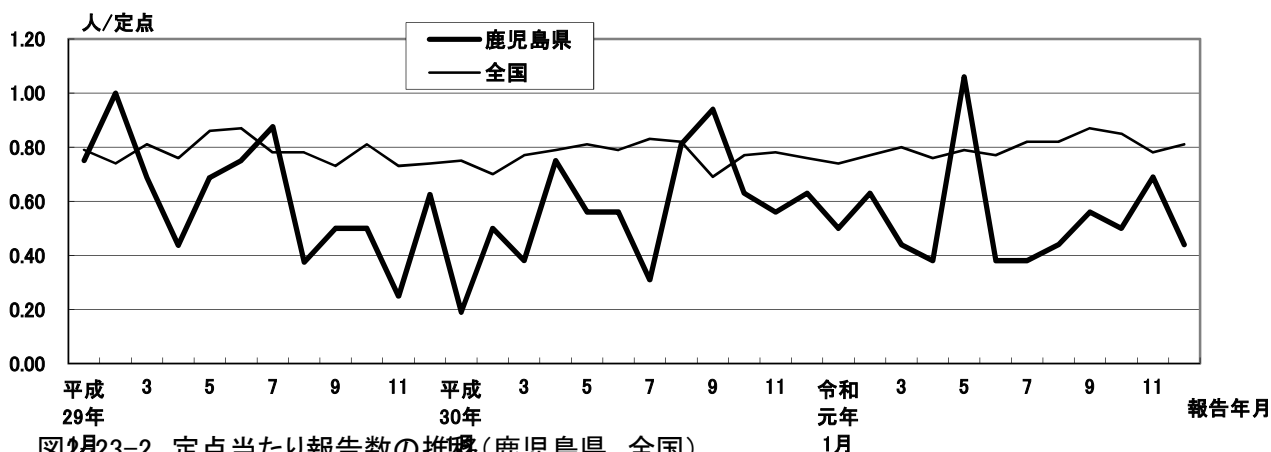


図2-23-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

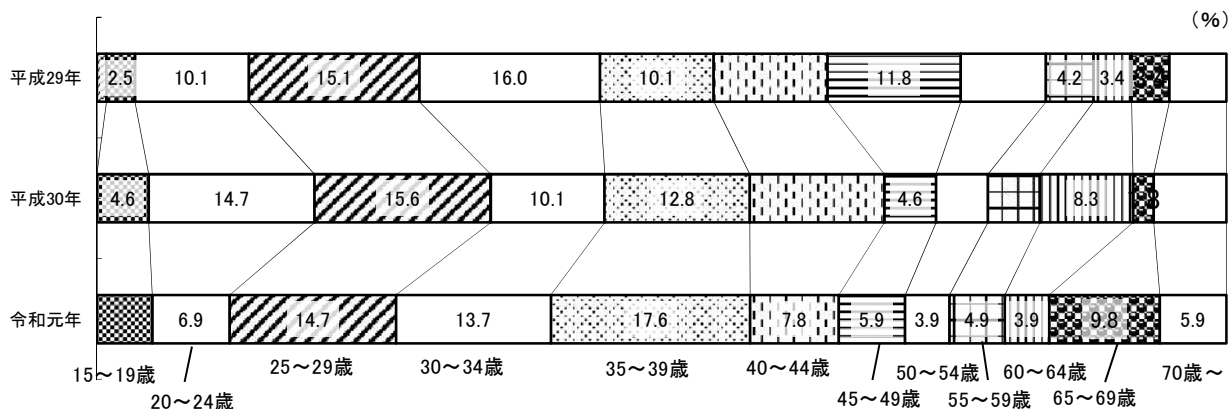


図2-23-3 年齢区別患者発生状況(鹿児島県)

## 24)尖圭コンジローマ

(定義) 尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス(ヒト乳頭腫ウイルス, HPV)の感染により、性器周辺に生じる腫瘍である。ヒトパピローマウイルスは、80種以上が知られているが、尖圭コンジローマの原因となるのは、主にHPV6型とHPV11型であり、時にHPV16型の感染でも生じる。

令和元年の尖圭コンジローマの報告数は86人(累積定点当たり報告数5.38)で、平成30年(63人)より23人多かった。月別報告数では、7月(17人)が最も多かった(図2-24-1)。全国と比較すると、7月以外は年間を通して少ない状況で推移した(図2-24-2)。年齢別では、25～29歳、30～34歳(それぞれ19.8%)、20～24歳(15.1%)、65～69歳(8.1%)の順に多かった(図2-24-3)。

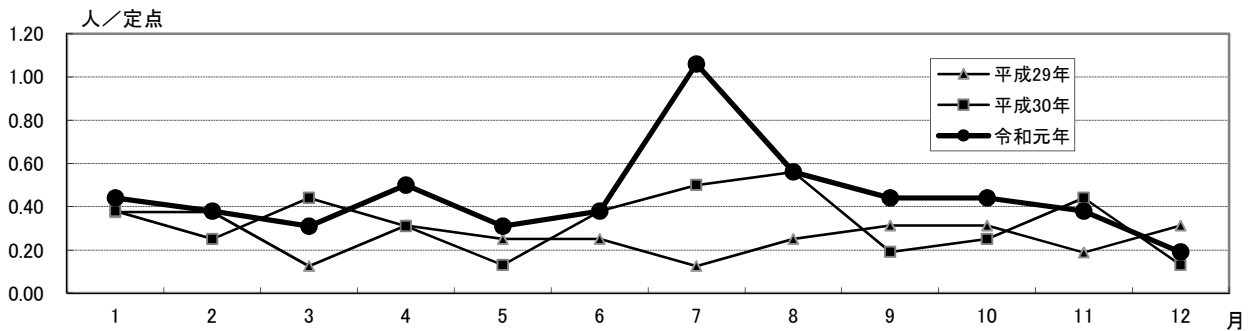


図2-24-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

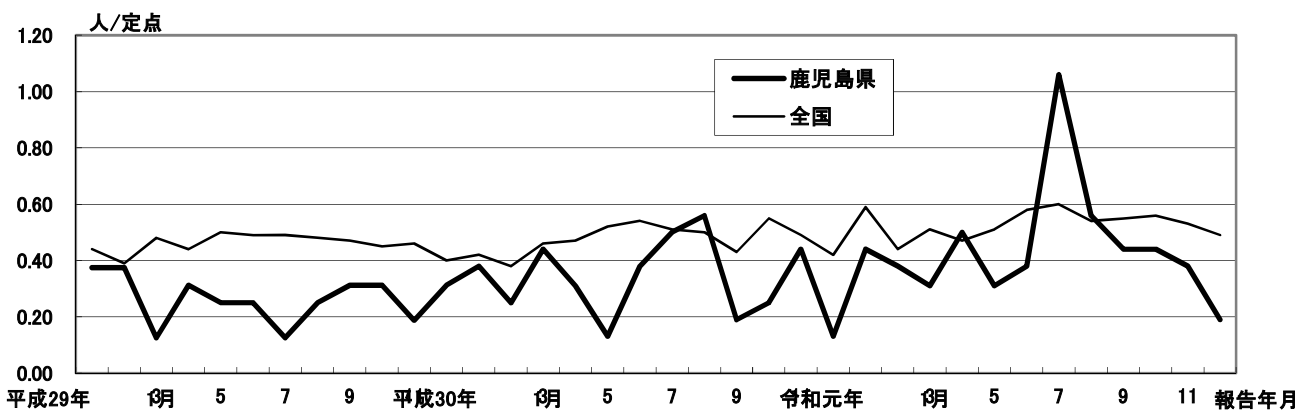


図2-24-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

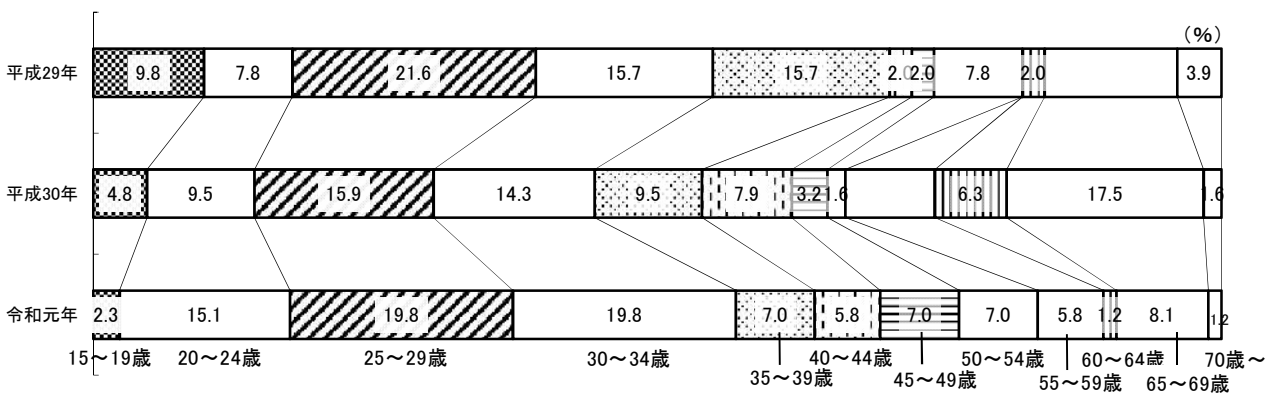


図2-24-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)タイトル

## 25)淋菌感染症

(定義) 淋菌 (*Neisseria gonorrhoeae*)による性感染症である。

令和元年の淋菌感染症の報告数は222人(累積定点当たり報告数13.88)で、平成30年(235人)より13人少なかった。また、月別報告数では、2月(26人)が最も多く(図2-25-1)、全国と比較すると7月以外は、全国を上回った(図2-25-2)。年齢別では、20~24歳(21.2%)、25~29歳(20.7%)、30~34歳(18.0%)の順に多かった(図2-25-3)。

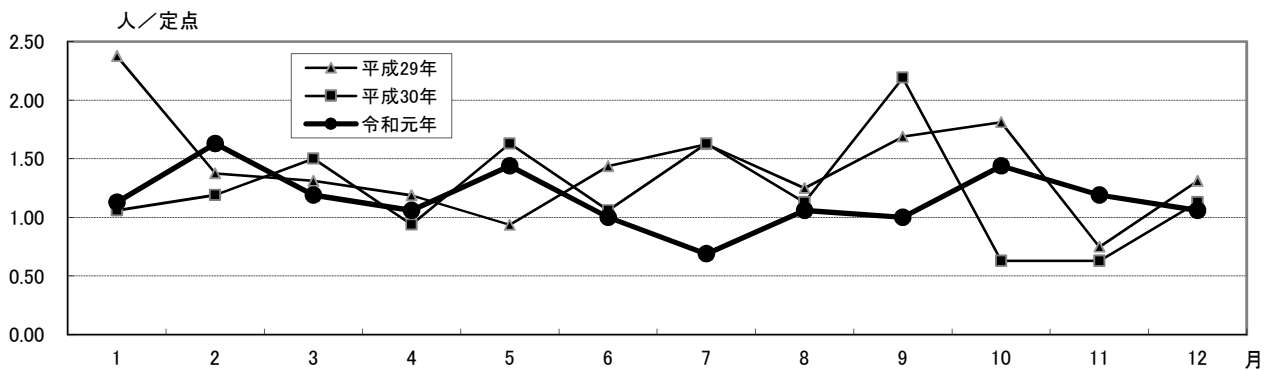


図2-25-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

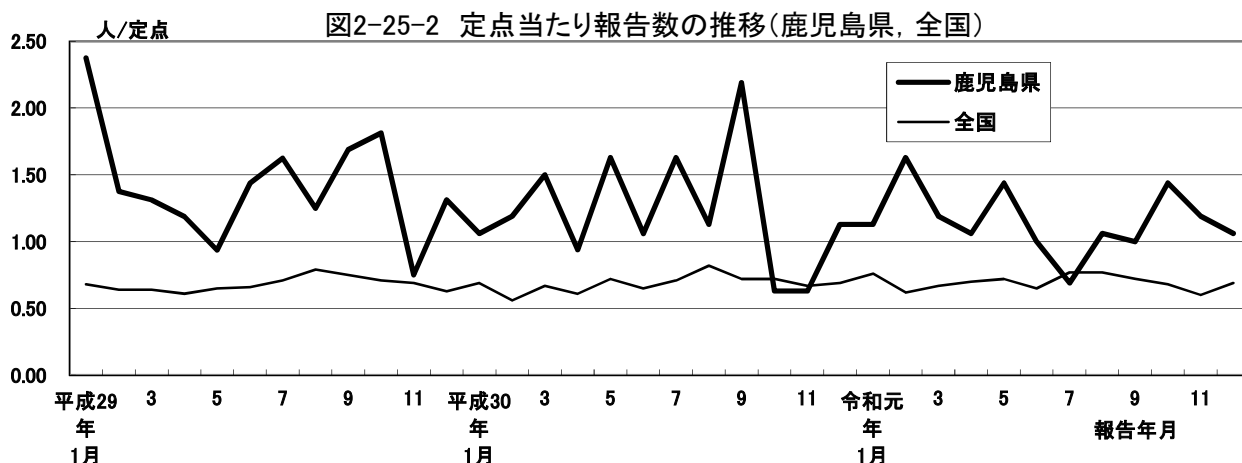


図2-25-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

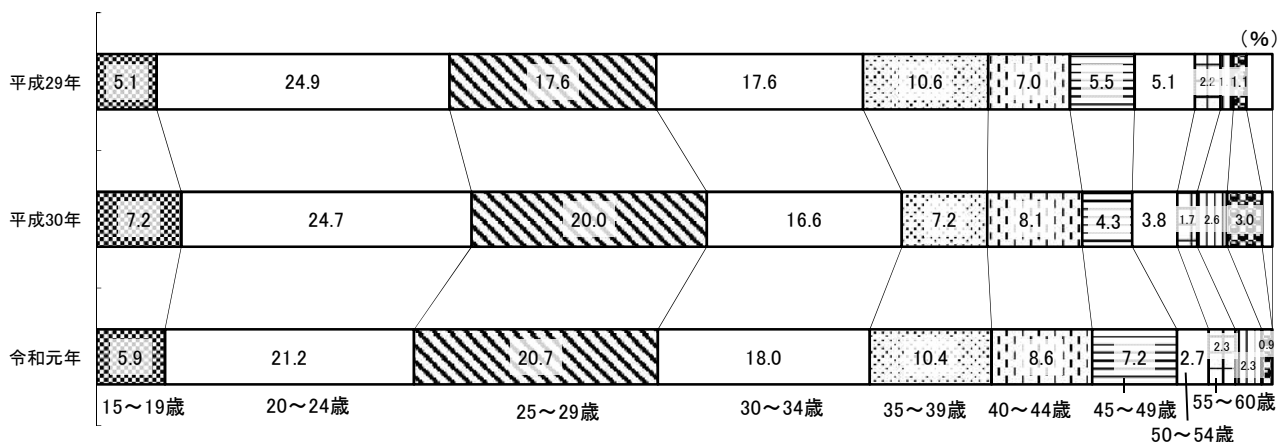


図2-25-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)